

Review



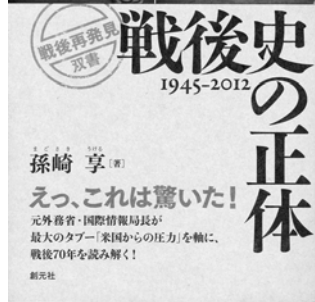
●BOOK

『戦後史の正体』

孫崎享＝著

定価：1500円＋税

発行：創元社



普天間基地の移設問題、オスプレイの配備、どれをみても「日本の政府、外務省はどっちの国のために働いとるんだ！日本はアメリカの属国か！」と、怒りと情けなさを感じる。

このモノ言わぬ日本政府に責任と情けなさを感じている元外務官僚もいる。外務省の国際情報局長だった筆者は、外交の現場から日本の戦後史を読み解き、対米追随路線と自主路線の二つの方向性があったと指摘する。

本書を紐解けば、自主路線をとろうとした首相や政治家がいかにして米国の圧力によってつぶされたかが分かる。長期政権となったのは吉田茂から続く保守本流の流れ、対米追随派なのだ。

アメリカに対して自主路線をとろうとした歴代首相がどのように追放されたか。そのシステムの一つに大手マスコミをあげている。

最近の例でいえば、民主党の鳩山首相が「普天間基地は最低でも県外」「新たな日米関係を築く」と言った後のマスコミの攻撃だ。

もう一つの装置が検察だ。筆者は東京地検特捜部が占領下でGHQの捜査機関

として発足したことを指摘している。

もちろん、全てを米国からの圧力としては論じられない。しかし今やアメリカについていけば良いという時代は終わったと認識する必要がある。米国の対日政策はあくまで自国の利益のために、取り巻く環境の変化で大きく変わるからだ。

「力の強い米国に対して、どこまで自分の価値をつらぬけるか」が今後の日本人にとって重要なテーマになるという。

そこで紹介されているのがカナダのピアソン首相。彼はベトナム戦争の時、アメリカの北爆を批判し、ジョンソン米大統領につるし上げられた。しかし国民はモノ言うピアソンを支持し、その後もカナダは自主路線をつらぬき、イラク戦争にも参戦しなかった。

あとがきで筆者は「本当の外交をしようと思ったら、必ず歴史を勉強する必要があります」と書いている。日本も安保に依存しない自主路線をとるには、歴史を知り、一人ひとりが自分の頭で考える姿勢を身につけることが大切だ。「高校生にもわかるように書いた」というこの一冊、ぜひおすすめです。

(渡辺美緒貴)